

女性のNGOが世界を変える

—北京で見た世界の女性の力と願い—

塩田 長英 (東京都/明海大学教授)

この8月28日から9月4日まで、7泊8日中国を訪問した。中国訪問は3度目である。今回の訪中の目的は第四回国連世界女性会議・NGOフォーラムに参加することであった。私は1988年に大学教員になってから、(財)市川房枝記念会で経済教室の講師を引き受けている。市川房枝記念会は、その名の通り女性の権利の確立と向上を目的としたNGOでその活動の幅は広い。日本のNGOの中核として国連のフォーラムに参加するが、5年か10年に一回しかない世界女性会議がアジアで開かれるのだから、男性もぜひ参加して現実を直視してほしいということであった。

国連は1975-85年を国連婦人の10年とし、世界の女性の地位の向上と人権の確立を目指した。1975年にはメキシコ・シティで第一回世界女性会議を開き、第二回は10年の中間にあたる1980年にデンマークのコペンハーゲンで、そして第三回は1985年ケニアのナイロビでその10年を締め括った。

1990年代に入って国連に大きな変化が出た。1992年にはリオデジャネイロで環境サミットが開かれた。93年にはウーンで世界人権会議が、94年にはカイロで国際人口開発会議が、そして今年の3月にはコペンハーゲンで社会開発サミットが開かれた。国際家族年、国際先住民族年、国際身障者年、なども決議されてきた。地球上の人権、環境、生活を見直し、平等、公平、平和、自由、開発を実現することが切実な課題となってきた。戦争、殺戮、貧困、不平等、環境汚染がひたひたと目の前に迫ってきたからである。女性会議はこれらの問題を、地球上の女性の置かれた状況から、根源的に問い直そうとしたのである。

この会議の大きな特徴の一つは、政府間会議(GO)と非政府組織(NGO)の会議が協力して行うという点にある。北京では8/30-9/8がNGOの会議であり、9/4-15がGOの会議であった。二つの会議の期間が重なるのみならず、NGOからの代表がGOの代表団に参加し、さらに会議の傍聴も認められている。ナイロビ会議からの努力の結果であり、国連のさまざまな会議のよき前例となるだろう。NGOフォーラムに出席する者は、ニューヨークに本部がある国連NGOフォーラム組織委員会にまず申し込み、その承認書と中国組織委員会の確認書をもとに中国のビザを取ることになる。私の登録番号は16357であった。

NGOフォーラム参加者は当初は中国を除いて36,000人、2,000余の組織といわれていた。しかし実際には国連の登録に遅れたり、中国のビザが取れなかったり、準備や資金不足であったり、自国の事情で出国できなかった人々がいる。実参加者は中国を除いて26,000人、アメリカが8,000人でもっとも多く日本が二番目で5,000人余だった。中国からは5,000人が参加したという。10年前のナイロビではNGOの参加者は8,000人、日本は1,000人だったそうだ。今回の規模は群を抜いていた。しかし、台湾やチベットの亡命者に対するビザではもめたようだし、中国政府の政策を批判する者には神経を尖らせていたらしい。

8月30日の夕方北京のオリンピック・スポーツセンターで開会式が開かれた。会場は大変な混雑だった。入場券をもらえない人も多かったと聞く。入場には空港並の手荷物検査と身体検査があった。各ゲイトで行われ、ミネラルウォーターの瓶や虫除けスプレーが持ち込み禁止であった。至

る所に公安係と思われる男性がいて、ハンディ・トーカーとカメラを動かしていた。不快であった。

スピーチは国連NGOフォーラム組織委員会事務局長のアイリーン・サンチャゴさん（フィリピン）、議長で主宰者のスパトラ・マスジットさん（タイ）、国連GO会議事務局長のガートルード・モンセラさん（タンザニア）、中国の政府・NGO団長で全国婦女連合会会長の陳慕華さんなどからあった。メキシコやケニアでの会議の主宰者であった方々の励ましの言葉やメッセージもあった。

会場の音楽やダンスは魅力的であった。十分な練習を積んでおり、会場で配布されたパンフレットにあらかじめカラー写真で掲載されていた。中国各地の少数民族を動員していた。少年少女が多かった。オーケストラの演奏も見事だった。鳩や風船を飛ばし、飛行船が上空を旋回していた。日没直前、興奮を残して開会式は終了した。

フォーラムの会場は北京の東北約55キロ離れた懷柔県であった。なぜ北京市内では駄目なのか、国連と中国の折衝は続いたが、中国側は首を縦に振らなかった。中国の民主化事情が大きな原因と推測される。懷柔県は北京のリゾートに当たるといふ。設備がかなり整っているとのことだったが、残念だがそうではなかった。

会場の設備、交通の便、情報、活動の自由などから、トイレ、食事、暑さや湿気と雨などにいたるまで不満があった。冷たい仕打ちにあったと感じたワークショップも相当数あったことだろう。冷房はなく、マイクの使用も認められないテントが数多くあったからである。9月1日はかなりの雨でテント内では討論もままならなかった。

開会式の前夜10時をまわってから、私達はIDカードとプログラムを受取りに労働者体育館へ出かけた。これがないと明朝から仕事にならないからである。多くの人々が詰めかけていた。

しかし会場の案内図が不足していてもえなかった。資料や情報が不足することは当然のようで

あった。我慢するしかなかった。中国のNGOも懸命に努力していたことは、会場のボランティアの動きを見ればよく分かった。おそらくもっと上部の政治的な判断がしばしば障害となっていたのであろう。

プログラムはプログラム・ブックと活動予定表とからなっている。前者はフォーラム全体の案内と主な会議やイベントを紹介している。活動予定表は200頁からなり、1頁に約20のワークショップが並んでいる。10日間で実に4,000ものワークショップが予定されていた。テーマは経済、政府と政治、人権、平和と安全、教育、環境、精神と宗教、科学技術、メディア、芸術文化、人種と民族、若者の13分野に区分されている。各ショップは持ち時間が105分、朝9時から夜9時まで延々と続くのである。

どこへ行けばよいのか、的確な判断は難しい。互いに情報を交換して興味深いものを探すか、足を棒にして歩きまわるか、特定した建物かテントに止どまって次々に参加してみるかしかない。私は日本のNGOのショップをいくつか覗き、あとは日頃情報が不足している地域の情報収集に集中した。アフリカ、中東、ラテンアメリカなどの地域の情報を求めた。ダンボール箱1個分ほどの資料を日本に持ち帰ったが、とても満足できる量ではない。さらに資料を集めたいと思っている。

アジア、アフリカ、イスラムなどの女性の力が目立った。衣裳が個性的で魅力的だった。ワークショップで見た東ティモール、キューバ、チェルノブイリ、イラン、イラク、カンボディアなどの女性の涙、微笑み、毅然とした姿、流暢な英語などが思い出される。

日本からの参加者には数多く会った。地方自治体が後援するNGOも多かった。北海道、青森、福島、新潟、富山、福井、神奈川、茨城、栃木、埼玉、東京、愛知、名古屋、米子、松江、香川、徳島、堺、尼崎、北九州、福岡、佐賀、熊本、沖

縄などからさまざまなグループで参加していた。それぞれがワークショップを開き、多様な評価や批判を受けていた。

日本からの参加者に観光気分が強いとの非難もあったようだが、それはどうだろうか。中国を知ることでも重要なことで、その国を知らないで帰ることは褒められたことではない。英語や中国語に弱いので参加度が低かったともいわれるが、それは女性に限ったことではない。私達みんなの課題である。

会議のスローガンは「平等・開発・平和」である。12項目からなる行動綱領の検討が続き、それは政府会議に引き次がれた。9月3日の夜、日本政府はNGOの参加者を約500人招いて交流を試みた。よい試みであったと思う。野坂官房長官や

土井衆議院議長などを囲んでNGOの参加者は次々と意見を述べていた。

政府間会議では最終日の9月15日に行動綱領が採択された。この内容については別の機会に書いてもよいと思うが、概要は新聞各紙の紙上で見ることができる。数多くの留保と妥協が見られたが、いずれにしても、これをいかに実現するかは各国政府と国民の努力にかかっている。国民の努力は女性のみでは不十分で男性の参加が不可欠である。だが日本の男性は政府代表団、報道関係者以外にほとんど見られなかった。女性の人権を考えることが、人類の抱える大きな問題を解決する鍵なのだという確信が、参加者の中で揺るぎないものとなったと思う。後戻りは許されない。

第22回「労働組合運動と『協同』」研究会のお知らせ

○テーマ：生協におけるパート労働の現状と課題

——コープかながわにおけるパート調査にもとづいて——

○報告者：八谷真智子（かながわ生協労働組合副委員長）

○日 時：11月17日（金）18：30～21：00

○会 場：明治大学駿河台校舎研究棟4階会議室

（JRお茶の水駅下車5分）

※会議室名は当日、1階エレベーター前にて掲示。